

<ショートレポート>

根源的な自発性を自発的に涵養する—国語科教育法という場

関西大学非常勤講師 梶井英人

「大阪国語教育アセンブリー2017」という集まりで、教育学者、太田堯さんの「根源的な自発性」という言葉に出会い、国語教育研究者、現場の教員たちと共に「根源的な自発性を問う」をテーマに討論をしました。以来、教育の鍵として、この言葉が心に根を下ろし、高校や大学での授業の構想と実践における軸となってきたと思います。国語科教育法(中学・高校対象)の学びの場で捉えた「根源的な自発性」についてレポートします。

■根源的な自発性

「…人間も、それぞれみんな、みずから変わる力、根源的自発性を持っているんです。…その、みずから変わる力を励ましていくこと、新しい情報を提供することで、みずから変わるのを助けてあげるのが教育なんじゃないか、と。変わるということは学習を重ねることです。生涯を貫くのは、みずから変わるという生物の根源的自発性によるんだ、と。こういうふうに、僕はいま、理論を立てているわけです。」(太田堯 2016)

この「根源的な自発性」は、何より教師自身に必要なのではないか。その基礎条件が教室を「根源的な自発性」が育まれる場所にするのではないか。そう思い、「国語科教育法」の参加者に自発性の具体的な感覚を経験してほしいと期待してきました。2022年度国語科教育法(三)(四)(関西大学)の参加者が形作った自発性のあり方を例に、言葉の学びをめぐる場で、自発性が起動し、進化するための条件を整理してみたいと思います。

この講座は土曜の5限に設定され、20~24人が参加しています。中学校教員免許用の講座でもありますが、(一)(二)を経験した学生がさらに学ぶために参加しているケースも多いです。また、大学院生、前年度に続く参加者、教育実習経験者、初等教育の専攻者、ベテランの現任教員、国語教科書の営業に携わる一般の方なども参加しています。春学期の(三)では教材研究を中心に、秋の(四)では50分の模擬授業を実施しています。

■選択の自発性と多様性

参加しにくい時間帯の講座をあえて選択するメンバーは当然高い自発性を持っている——確かにこの条件は、一定の参加者の特質を基礎づけていますが、じつは履修の組み合わせの関係で「これしか選択できなかった」という参加者もかなりいます。教職を目指すかどうか迷いながらの履修者も混じっています。選択の自発性の温度差や個性の違いを超えて、教室全体の自発性が芽吹き継続するための条件は何か。

まず、教室の魅力や気づきを促す条件として、「多様性」を挙げる証言が多くあります。以下、レポートの一部から引用します。

(視点の多様性)教材に愛情を抱くためには、深い教材研究はもちろん、教材を見る視点を多く持

っている必要がある。この授業では国文学系の学生が多い。彼らの模擬授業や発言を聞いていると、自分とは違う視点から教材を見ているのだなと感じることが多くあった。今後も、多くの人の授業を受けて自分の教材に対する視点を増やしていきたい。

(多様性の受け止め) 国文だけでなく多様な専攻から参加されているようで、出される意見もそれぞれに個性を感じました。なるほど、そういう疑問をもつのか、その発想面白い、と感じることが幾たびもありました。大変勉強になっています。

(校種を超えた交流) 受講生と話す度に、校種をまたいでの教員の交流は大事なのではないかと思われました。教員になってから校種をまたいだ人脈をつくること、学習会に参加すること、他校種を他人事だと思わない姿勢は重要であると思います。受講生との出会いはそういった意味でも、とても貴重なものでした。親しくなった今、友人として今後も交流したいと思う気持ちと、様々な校種・自治体・各私立学校にわかれていく皆のことを、教員仲間として大切にしたいと思います。

異年齢の教職経験者や教科書に詳しい方の発言も大きな刺激になっています。大学の外にも学びの場が広がっていること、歴史的に発展してきた国語教育の遺産があること、これらを知ること参加者の視野を広げ、求める気持ちを育てています。

(自分の弱点への気づきと分析) クラスティングの投稿を読むことを通して、よい文章とは何かについてなんとなくわかってきた。よい文章の特徴の1つ目として、書かれている内容が脳内でイメージできる文章ということが挙げられると思う。クラスティングに書かれている内容は、教材に関する専門的なことや自分は経験したことのない、教育の現場に立ったことがある人の視点から書かれた意見などが多い。難しい内容ではあったが、書かれている内容が脳内でイメージしやすいと感じることが多くあった。私も難しい内容を読者のことを考えてわかりやすくかみ砕いて表現できる文章力を身に着けたい。

「クラスティング」というのは、授業で使っている教育用 SNS です。多様性を肯定的に受け止める発言に共通することは、自分とは違う発想を自分の中で消化しようとする態度、そして、その受け止めを今度は自分なりに何とか表現しようとする態度です。この相互作用は、国語教室にとってたいへん重要だと思われます。

■教材研究が生む「安心」

受け止めと発言が保障される条件は「安心」だと感じます。次の証言には「安心」がキーワードとして使われています。

(安心できる空気を作る) 最後の授業で、「教室の空気が作られていった」ということを先生がおっしゃっていました。「空気を読む」ことばかりしてきた私にとって、「空気を作る」という言葉はとても新鮮でした。学校から与えられた空気に染まり、自分もその空気を吸って上手に生きていくことはとても苦しかったことを思い出しました。高校時代、「勉強ができない」私は、自分の言葉や意見を発表したことはほとんどなかったと思います。けれど、この授業は違いました。「待ち伏せ」(教材

名)から始まった、「誰も馬鹿にせず、話を聞いてくれる空気」。それが、この授業で私が一番に感じたものです。ここでの「空気」はとても安心してきて、自分の気持ちや考えが、すうっと言葉になりました。それはみんな同じだったのではないかと思います。「勉強ができない」自分を忘れられる時間でした。この授業に出会えて私はとても嬉しかったです。

「『待ち伏せ』から始まった」というのは、ティム・オブライエンの小説「待ち伏せ」をテキストとして、教材研究を行ったときのことを意味しています。春の初め、まだメンバーがお互いを知らない段階です。ウクライナへの侵攻が連日報じられる中、高校教科書によく載っている、ベトナム戦争を題材とした作品を選びました。

「誰も馬鹿にせず、話を聞いてくれる空気」が醸成されるための、国語教室における試みの1つとして、「ツッコミ読み」と俗称しているテキストとの対話読みを実践しています。理論や知識、教師の課題提示はさておき、とにかく素手で本文に向かう。私たちは文字を目にしたとき、内部でめまぐるしく反応し、何らかの情報処理を開始します。しかしそれは言葉以前の何かであって、目にする文字列が進むにつれ、既成の枠組みを当てはめたり、情報を統合したりしつつ、安定した理解を求めていきます。「ツッコミ読み」では、そのとき、内語として泡立つ疑問や驚きや推測や、そのさまざまなものを素直に「出す」ことを求めます。「この漢字なんて読むの?」といったものでいい。まず「安心」して、素朴な内語を口にしていい場を作ること。教師は、ぼそとした言葉が自発的に出てくるのを待ちます。参加者は、たった一文二文の中にも自分がいろんな「?」や「!」を思い浮かべていることに気づく。誰かの発言を聞き、「たしかにそこも謎だ」と気づく。この気づきの玉が転がり出したらしめたものです。この春の素朴な「教材研究」の始まりが、「安心」を醸し出す初期条件を形作っていると思われます。

この感触はやがて、「教材」として本文を読むことの意味の探究に接続します。それは、自分と違った読みを排除せず、また、批判は批判として発言する中で、読みの可能性を広げておくからこそ、達成されることだと思います。次の証言はその結実だといえます。

(意義を見出す)ある題材を扱うときにその教材を用いて自分は生徒にどのような力をつけさせたくて選んだのか、どんなことを考えさせたくて取り上げたのかは必ず明確にさせなければならない。特に高校の国語科は教科書に記載されている全ての教材を扱うわけではないので、選択できる。そしてそこには必ず意志が介在する。扱う教材が通例で決まっていたとしても意義は見出さなければいけない。生徒にとっては一回きりしかない授業だからだ。そのための教材研究や自分の言語感性を磨くことの重要性を学ぶことができた。

(教材研究の意味)最終回において、私はたいへん衝撃を受けた。「こんなに短い詩で本当に50分も授業ができるのか?」と感じたことではない。実際は生徒が活発に意見を出して交流を行い、みるみるうちに時間は過ぎていった。「なるほど。これが国語の授業におけるアクティブ・ラーニングか」と深く納得し、自分の浅はかさに衝撃を受けたわけである。『教材研究』がなんたるか、を最終回にして改めて思い知った。文章の長さなどは関係なく、その教材から読み取ることができる内容を教員自身が可能な限り知っていること、そんなことは私以外全員が理解していたのかもしれない

のだが、この1年間の国語科教育法を通して、最後の最後で理解したのだ。…文章を面白いと思う気持ちを心に留め、その面白さを他者に向けて言語化できる人でありたい。…ふと見つけた「文章」というものに意識的に目を向ける作業から、国語教員を目指す自分が生まれ変わっていくようにしたい。

■人間としての成長・時間の自由

(共に学び自分が進化する魅力)まさか、年間を通じて土曜の5限を受講するなんて思いもしませんでした。…ぜひ来年も!!と思うぐらい、みなさんと濃くてあたたかい、充実した時間を共有できて幸せでした。…このような深く考える授業は初めてで、新鮮でした。…私にとっては中学校、特に高校の授業は難解で、手のつけ所がわからないという印象で苦手でした。ですが、文学的にも深く考えることのできる年齢の生徒たちと共に学ぶということに魅力を感じることができました。

(視点の転換)回を追うごとに皆の感性がするどくなっていき、何をやっても、「こうしたらいいよ!」「ここはなんでそうしたの?」といった意見や疑問が際限なく出るのが、興味深かったです。授業をするだけでなく、授業を受ける中で感性が磨かれていく背景には、授業者の視点、教師の視点で皆さんが授業を見られるようになったことがあるのかなと。私も少しはそのようになれていればよいなと思います。

このような自分自身の変化についての気づきも多く見られます。そこには、知識やスキルを身につけたということだけでなく、今まで見ていなかったものを見られるようになったといった、人間的な器量の変化への言及が含まれるのが、国語教室の特徴です。さまざまな主題を扱った教材をめぐって議論するうちに、そこに含まれる、現代の、あるいは、古代から続く普遍的な人間の問題をわが身に引きつけて思考するようになるからです。それらの気づきの交換は、まったく自発的に発生します。

(自分からの出発・人と作品に向き合うこと)初心忘るべからずで、初めて作品と向き合う時の感情や考えを基礎として、自分の意見にこだわり過ぎず、双方向のコミュニケーションを大切にして、教室全体で一つの作品と作品に生きる命と向き合っていきたいと感じる。全ては経験とその後の振り返りと、また実践…の繰り返しなのかな、と。そして教師や生徒、作品など、人と関わることで、新たなアイデアや思考の幅が生まれていくのだとも感じる。人と自分と向き合い、学び続ける姿勢を忘れず、今後の勉強や実習に励みたい。

(よりよく生きること)授業後の協議でも、何を重視するかで方向性の違う意見がぶつかりながら、教室全体が一致してよりよい授業を模索する経験は教員採用試験の更に向こうである教壇に立つ際に生きる力だと感じた。春学期の教材研究を含め、教師としてだけでなく、よりよく生きることにもつながる教室であった。

議論がそこまでしみ通るには時間が必要です。それはシラバスにパッキングされたコンテンツを効率よく消費することでは得られない。いつまでにこの教材を読み終わらなくてはいけない、ということがない。問題意識の火をともし続けていていい。土曜5限という時間設定もこの時間的な保障に寄

与したと思われます。

(授業後も続く議論) 秋学期も春学期に引き続き、毎時間学びが多く濃い時間を過ごすことができました。皆さんの模擬授業や毎時間の協議、授業後も続く議論、クラスティングの投稿は、鋭い指摘や別視点からの発想で溢れていて刺激を受けっぱなしでした(私の主戦場は相変わらずクラスティングでしたが)。授業をすることの難しさだけでなく、楽しさも知りました。教室で教材に向き合い、問いをぶつけたり、問いにぶつかったりしながら、謎が解けたり、つながりを見つけたり、また疑問が出てきたり、そんなことを繰り返しながら読みが深まっていく、そんな皆さんの模擬授業とても楽しかったです。将来教室で5限のわくわく感を再現したいと強く思います。

参加者たちは授業後も教室で、あるいは帰りの道々議論を続けていました。さらに、クラスティングという教育用 SNS を使い、LINE 感覚で議論が続きました。この継続感は、講座が閉じられた後にも彼らの中に潜在すると思われます。

(残る議論の跡と問い) 模擬授業が終わった後、各授業者がどうして今回の教材を選び、どうして今回のような内容にしたのかを聞くのが興味深くて、毎回楽しみにしていた。…クラスティングに投稿しない週も多く不真面目な生徒だった。しかし、一人一人の個性あふれた模擬授業や、様々な観点からの意見が出た協議に参加していた感触は今でも残っている。また、配布された資料や、クラスティングの投稿が手元に残されているので、ときどき思い出したり目を通したりして、今後の参考にさせて頂くとともに、それぞれの授業で出された〈問い〉に対する自分なりの答えを見つけたい。

■教師の役割・教室環境

教師は自発性の発火にどう関与するのか。1つは先に挙げた、安心して発言できる場の設定でしょう。教材研究の場合はできるだけお互いの顔が見える座席配置にする(物理的な環境条件は重要です。座席が自由に動かせることは、小中高の現場の実態から考えても、教科教育の講座には必須の条件でしょう)。参加者の顔を見ながら、発言を受け止め、耕し、渡していく実例をやってみせる。2、3時間やった後は、参加者が交代で進行を務めます。春に発言できる場が耕されれば、模擬授業の協議の段階では、私はほとんど「漬物石」のように座っているだけです。発酵できる環境を作ったら、静かに待つ。

(国語教室を作る) 学級開きの重要性も学びました。そして、教科の授業のなかで学級をつくっていくことの可能性も実感しました。もっといえば、国語の授業だからできる学級づくりがあると思えました。この経験を、感覚を、よく覚えておきたいと思います。

(軸となる学び・広がる学び) こんなにも意欲的に取り組んだ授業は他にありません。いつもこの授業が軸にあって、他の学びに繋がっていったように思います。環境に引き上げられて学びがどんどん深まっていきました。これからは、自分の力でこのような環境を整えられるように、「あの授業を受けていた時はよかったな。頑張っていたな」と、そんな情けない振り返りをする日がこないように、頑

張りたいと思います。働き始めるととても忙しいと思います。でも、もっともっと面白くなると思います。今のモチベーションを保ち、自らどんどん学び続け、次は目の前の生徒がこんな充実した学びをできるように、努める番であると思います。

「漬物石」の内実は何か。「漬物石」はなくてはならないものです。「漬物石」があるから安心と発酵が進みます。矛盾するようですが、教師は2つのことを用意しています。

1 教材研究や模擬授業の焦点がどこにあるかわかっており、議論がどこに向かうべきかわかっている。

2 議論が自分の思いもしない方向に進むことを期待し、それについて一参加者として加わりたいと思っている。

私はこの2つを抱えながら、教室を観察し、教室に参加しています。「1」は自分の経験や知識に基づく問題意識であり、「2」はそれが進化することへの期待です。これらはとりもなおさず、参加者全員の課題でもあります。教師は同次元で同期しつつその渦中へ入り込み、同時に俯瞰しています。教師の発言は、強すぎず、議論の整理やそれを深めるきっかけを与えることに収めるべきだと今は思っています。これは高校現場でも同じです。

3 総括および発展的議論を示す。

時間があれば最後に本質を簡潔に発言し、なければ日を置かず教育用 SNS に投稿します。この発言や投稿がさらに参加者たちの投稿につながっていく例も多くありました。

(遠方より朋の集ふを求む) 毎週志を同じくする仲間から多量のエネルギーを受け取ることで、そのモチベーションを維持・向上することができた。このような環境、教室をつくる先生の手腕には4月の段階から感嘆し、こんな教室を作ることが一つの理想だと感じている。この授業のように、自分たちの授業を協議・批判しあい高めていくことは今後ないのだろうか、と思う。同級生にはすでに教壇に立っている者もいる。この授業で一緒だった3回生たちは、次年度4回生になり、進学する自分より先に教壇に立つ。4回生になると、もう模擬授業の機会などない。ましてや協議・話し合う機会など猶更である。就職した同級生は業務に忙殺されている。教師の卵が自分を磨ける時間は少ないのだろうか。できることなら、ここで出会った人たちとはこの先も関わりを続けていきたいと思う。

「根源的な自発性」を発揮して、仲間と学びの場を作ってみたら?とメールしたところ、「はい。すでにやろうかと話していたところでした!」と返信が来ました。次世代に「根源的な自発性」の種が播かれ広がることを期待します。

※ 全国不登校新聞社「不登校 50 年証言プロジェクト #05 太田堯」

<http://futoko50.sblo.jp/article/177154916.html> 2016 年 10 月 6 日